

なく發揮、表現されている。

本書簡に述べられている執筆計画の多量さには、驚嘆に値する。おそらく、出版社の求めには辞すること知らず応じて、我が身を削っていたのであろう。一九五一年当初の計画を整理して列挙してみよう。

- (1)「赤道祭」(『毎日新聞』二月十一日～八月十九日)
- (2)「街の燈台」(『街の灯』(『北海タイムス』ほか二月十六日～?)
- (3)「鎮西兵団」(後の「革命前後」)(『改造』四月号に執筆予定であったが、中止)
- (4)「現代の講談」(題不明)(『新潮』二月号から。中止)
- (5)「新遊侠伝」(『小説新潮』一月号「泥鰌」)
- (6)「あひる座」(『別冊小説新潮』一月号)
- (7)「私版金色夜叉」(『月刊読売』一月号～十一月十一日号)
- (8)「活火山」(『労働文化』一月～六月)
- (9)「雲を呼ぶ笛」(『小学六年生』四月～五年三月)
- (10)「魔女裁判」(『女性改造』掲載なし)
- (11)「夫婦」(『群像』二月号発表予定だったが、掲載されず。結局『文芸』五月号に掲載。)

これだけの計画を抱えており、三月までに発表されなかったものは、(3)「鎮西兵団」、(4)「現代の講談」、(10)「魔女裁判」、(11)「夫婦」の四編である。しかし、鶴島正男編「新編火野葦平年譜」には、本書簡にのっていない作品が、一月に「教祖」(『小説公園』)、「海御前」(『文学界』)、「父の素描・市井人の一生」(『新潮』別巻一号)、二月に「血風若松港」(『面白倶楽部』)、「永遠の追放者」(『文学界』)、「四月に動物」(『群像』)、「わが悪友長谷健のこと」(『小説公園』)があり、その数、七編に及ぶ。また『文芸年鑑』一九五二年度版に

よると、五一年一月から三月までに雑誌に発表したものと

として、その他に「猫と町の歴史」(『週刊朝日』新年増刊号)、「教祖」(『小説公園』一月号)、「取りかえ

ばや物語」(『キング』二月号)の三編も発表している。いくら追放中に発表できなかったストックがあつたとは言え、その多作ぶりは神業である。葦平が恐れた「バカな無理」を重ねたのは、彼の否とは言えない人のよさと書かずにはおられぬ文学への執念であつただろう。

それはやがて多作から濫作になり、ひた隠しに隠してきた身体の不調を他人の前に晒す結果となる。九年後の自裁に至る「バカな無理」は、一家の大黒柱として扶養家族百人、月収百二十万円を超えるといわれた経済的負担の責任と九州文学の中心的存在、象徴的存在の自負とに起因したと思われる。九州男児の典型のように豪放磊落に見えながら、繊細な神経と寂しがり屋な面をもっていたことは、「てがみおくれ」という末尾の一文に表れている。

ともあれ、戦時中は「兵隊作家」と祭り上げられ、戦後は「戦犯作家」と罵られ、「義理人情作家」「遊侠作家」と軽視された火野葦平は、一九六〇(昭和三十五年)年一月二十四日午前五時、自宅の河伯洞で睡眠薬を飲んで自らに決着をつけた。

〔付記〕本稿は『福岡女学院短期大学紀要』第二十九号「河井醉著・蒲原有明書簡の紹介」から始まった「野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻」シリーズの第七回目に相当する。筆者の所属変更のため、今後、本紀要に発表の予定である。また、「火野葦平書簡の紹介」としては、『文学批評 叙説』第十三、十五、十六号に引き続き、第四回目に相当する。

今回は文部省科学研究費補助金(一般研究C)による野田宇太郎文学資料館所蔵の書簡研究の第十回報告

であることを申し添えておく。

会(上)』(創思社出版、一九八五年五月)によると、同居していた矢野の古風な母と折り合い悪く、物静かな母は首を吊って自殺した。通夜の時、彼女は「陰気な母でしたので、この家からじめじめしたものを追い出そうと思ひまして、皆さんに宴会を催していただきまして」と言ひ、お祭り騒ぎのさわがしい用ひになった。その後、妻を避けて矢野は東京の葦平の鈍魚庵に逃げて来たが、彼女は追いかけて来た。結局、葦平が仲に入って別れさせた。

71 「夫婦」 矢野朗の第四の妻との結婚と母親の自殺を題材にした火野葦平の小説。『文芸』一九五一年五月号に発表された。坂口博の前記「矢野朗と『文学会議』」によると「『夫婦』は、長篇小説として発表されたが、続篇が書かれることはなかった。」とある。

72 「群像」 文芸雑誌。一九四六(昭和二十一年)十月創刊。講談社発行。純文学の面では遅れていた講談社が純文学の創作に新味を出そうと発刊した。「創作合評」や匿名時評「侃侃諤諤」も話題を呼び、発刊五、六年で純文学誌として声価を定めた。本社は文京区音羽町三一一。当時の編集長は有木勉。なお、火野葦平の「夫婦」は『群像』一九五一年二月号に掲載されず、同年五月『文芸』に発表された。

73 「日本艶笑滑稽譚」 短編小説集。東京文庫。一九五〇年十一月三十日発行。収録作品 片目の鈍魚 銀の金槌 鐘と太鼓 象の卵 小紋散らし 三馬 鹿 蝮と骰子 結びの神 あとがき。

74 「昭和鹿鳴館」 短編小説集。比良書房。一九五〇年十月三十日発行。収録作品 昭和鹿鳴館 敗将 鎖と骸骨 人魚昇天 あとがき。

75 創元社版「追放者」 短編小説集。創元社。一九五一年一月三十一日発行。追放解除後第一創作集。収録作品 牢獄 追放者 花と罪 イルマ殺し 後書。

76 奥さん 劉寒吉の妻濱田澤江。旧姓遠藤。一九三六年四月、濱田陸一(劉寒吉)と結婚。寒吉歿後、澤江夫人の意思で『劉寒吉詩集』が刊行される。一九九二年四月にも澤江夫人の意思で『長崎小話』が刊行された。

77 「近世快人伝」 世界社版「富士」編集部が「近世快人伝」というタイトルの下で、いろいろな作家に近世の「快人」——大人物であるが、奇人であり、型破りのスケールの大きい愉快な人間——を書かせたシリーズ物と思われる。火野葦平は一九五〇年四月号に「近世快人伝 天馬の仁三郎」を書いた。おそらく葦平が劉寒吉にも執筆を勧めたものである。しかし、「富士」が原稿料を払わないので、劉から送られた原稿を他の雑誌に紹介して回そうとしたのであるまいか。その劉の作品が何であったのか、また何という雑誌に発表されたのか、一切わからない。推察すれば、玄洋社の頭山満を主人公とした伝記を劉が書いて葦平に送ったものの、結局、玄洋社の右翼的傾向から占領軍の検閲を危惧して発表を差し控えたものと思われる。

78 玄洋社 明治・大正・昭和時代の超国家主義的政治団体。福岡藩の不平没落士族が向陽社を結成したが、一八八一年、天皇中心、国権民権交錯したまま、玄洋社と改め、当初本社を福岡市本町に置き、後に西職人町(現・中央区舞鶴二丁目)に移転した。社長は平岡浩太郎、幹部は頭山満、内田良平、箱田六輔らであった。初め国会開設運動に参加したが、政

府の条約改正案に反対、次第に對外強硬策を主張、国権論に傾き、超国家主義的な右翼団体の中心的存在となった。一九四六年占領軍により右翼的団体解散命令によって解散した。

五

一九五〇(昭和二十五)年十月十三日、火野葦平は公職追放を解除された。彼はその日を「金曜日の十三日」と「自筆年譜」(『火野葦平選集』第八卷、東京創元社、一九五九年六月三十日)の中で自嘲的に書いている。ともあれ、葦平は自由を得た。しかし、時勢は再び大きく変化した。五〇年六月、朝鮮戦争が始まり、レッドパージ、警察予備隊令が公布され、占領軍の対日政策が大きく転換した。その中で一万九百名の追放解除が発表されたのである。この時、葦平も文筆家の追放指定を解除された。全く、戦争中は日本軍隊に利用され、戦後は連合国占領軍に翻弄されたのである。

彼はこの時の心情を小説「追放者」(『改造』一九五〇年十二月号)に書いている。そして、今まで抑えられたものが一気に吹き出したように書きまくるのである。本書簡にもあるように、「りんてんき(輪転機)を本格的にうごかすことになる」のだ。「力のつづくかぎり、ペンのつづくかぎり、書く」とある。バルザックの五十台の機関車には及ばないが、「五十台くらの小型機関車を一度にうごかす」覚悟で出版社の求めに応じて、次々に作品を書き、発表を続ける。「バカな無理はしたくないが、もってあるだけの力はぶちまけたい」と一応は自戒しているものの、無理の上に無理を重ねている。本書簡には、九州における最大最高の親友劉寒吉に対する信頼と昂揚する作家魂とが遺憾

63 講談クラブ正しくは『講談俱樂部』。大衆雑誌。

一九一（明治四十四）年十一月創刊、一九四六年二月休刊。一九四九年一月復刊、一九六二年十二月廢刊。講談社発行。講談の流行に刺激され、講談を大衆啓蒙の手段として活用するために野間清治によって講談を主軸に創刊された。一九一三年六月、講師速記に頼らず、作家執筆による「書き講談」になって急激に部数を増加した。大正期は吉川英治、中村武羅夫、長田幹彦、村上浪六らが清新味を加えた。昭和期には加藤武雄、江戸川乱歩、牧逸馬、角田喜久雄などを掲載、「小説読むなら講談俱樂部」の標語どおり定評を得た。戦後は戦争責任の自粛の形で一時廢刊。復刊後は山手樹一郎、源氏鶏太を世に出した（『日本近代文学大事典』5）。当時の編集長は星野哲次。

なお、一九五一年一月号から十二月号まで劉寒吉の小説は掲載されていない。

64 「富士」は娯楽雑誌。ここでは戦後講談社から分かれた世界社より一九四八年から一九五三年まで刊行された「富士」であって、一九二八年一月から四一年十二月まで講談社から刊行された「富士」とは違う。編輯兼発行人は土田喜三、印刷人は大橋芳雄、発行所は世界社（東京都文京区音羽三丁目一九番地）、印刷所は共同印刷株式会社（東京都文京区久堅町百八番地）であった。当時の編集長は萱原宏一。

なお、劉寒吉は既に「富士」には、一九五〇年三月に「早春の蝶」を発表していた。また、葦平の忠告にもかかわらず、劉は「富士」に一九五一年三月号に「初雪ぞ降る」を書いている。岩下俊作も同誌二月号に「川筋に現れた男」を書いた。

65 四月号は世界社版「富士」一九五〇年四月号に火

野葦平が発表した『近世快人伝 天馬の仁三郎』（挿絵は河野通明）のことである。小説の末尾に編集部からの謝辞が「本編掲載については石井俊次氏の格別の御厚意により、夢野久作氏原作『近世快人伝 篠崎仁三郎』に負う処甚だ多きを特記し、厚く謝意を表します。」と載っている。そして、編輯後記では「火野葦平氏の『天馬の仁三郎』も最近の大傑作で、凡そ風変りな異色編として、読者の大喝采を博することでしょう。どうかこれをお読み下さって神経衰弱やとげとげしい気分を吹き飛ばして頂きたいというのが、同人一同の意図であります。」とある。しかし、葦平への稿料は支払われなかったのである。その後、支払われたかどうかは不明である。

66 「世間ばなし」は劉寒吉著短編小説集「世間ばなし」（春陽堂文芸叢書）のこと。一九四七年一月二十日発行。春陽堂。収録作品 世間ばなし 商人伝 復活 靴 三寒四温 老兄妹 師匠 赤絵の皿 翁。

67 矢野朗は小説家。一九〇六（明治三十九）年一月十九日、小倉市大坂町に生まれた。米町小学校を経て、豊国中学校（現・豊国学園高等学校）中退。一九二一（大正十）年文楽の竹本津太夫に認められて大阪に移り、津の子の芸名を受けるが、酒色に溺れて破門、帰郷した。一九二三（大正十二）年同人誌『微光』主宰。二六年劉寒吉、岩下俊作らと「白夜会」発足。一九二八（昭和三）年久留米に移り、一九三六年『九州文壇』創刊、三七年丸山豊らと「文学会議」を創刊、第四冊で葦平の「糞尿譚」を掲載し、第六回芥川賞を受けた。三八年九月、第二期『九州文学』編集委員となった。三九年八月「肉体の秋」は芥川賞候補となった。四一年度「文学及び文学者」

で第二回九州文学賞評論賞を受賞した。一九四七年五月、復活第一回九州文学賞小説賞に「めとる」が受賞した。五九年六月三十日、小倉市立病院で死去。五十四歳。著書に『肉体の秋』（一九四〇年一月二十四日、春秋社）、『生炎』（一九四四年三月二十日、泰光堂）、『神童伝』（一九四六年十月十日、和田堀書店）、『青春の答』（一九五七年十月三十日、東京書房）など。

68 吉井は福岡県浮羽郡吉井町。一九四九年十月ごろ、矢野朗は吉井町の義太夫愛好者の家に移り住んでいた。矢野朗の長編小説『神童伝』の主人公釜石童二郎は矢野自身がモデルであるが、浮羽郡吉井町生まれということになっている。

69 「砂地獄」は矢野朗の「婚歴」四部作の第四目であろう。一九四八年矢野は第三の妻が亡くなると、第四の妻と結婚した。矢野は第四の妻のことを小説「砂地獄」と題して小説にしようとしたのである。しかし、この作品が発表されたかどうか知らない。

70 千絵女は矢野朗の第四の妻。白水千絵（本名であるかどうかわからない。坂口博「矢野朗と『文学会議』」へ「文学批評 叙説」XV 花書院、一九九七年八月二十五日）による。火野葦平の「神童の果て」（『小説新潮』一九五九年九月号）、「矢野津の子太夫」（『文芸春秋漫画読本』、同年同月）によると、「原口縫子」となっている。葦平によれば、縫子は女子大出、天才と呼ばれた才媛で、女学校の教師をしていたところ「源氏物語」をテキストなしで講義をしたという。矢野の小説の熱狂的な愛読者で、背が高く美人であった。しかし、一種の分裂症で迫害されているという強迫観念に襲われていた。精力絶倫で嫉妬心が強く、ヒステリーであった。劉寒吉の『わが一期一

- 第三部 新市街(『改造』一九四一年九月)
 第四部 花扇(『文芸』一九四六年十二月)
 第五部 水祭(『風雪』一九四九年三月)
 第六部 夜鏡(『文芸』一九五〇年一月)
 単行本としては、
- ①『幻燈部屋』改造社、一九四二年三月
 幻燈部屋 神話 新市街 あとに
- ②『幻燈部屋』六興出版社、一九四八年九月
 幻燈部屋 神話 新市街 花扇 後記
- ③『花扇』六興出版社、一九五三年九月
 幻燈部屋 神話 新市街 花扇 水祭 夜鏡
 あとがき
- ④『幻燈部屋—幻燈部屋上巻』(角川文庫985)
 一九五四年十二月
 幻燈部屋 神話 新市街 解説(野田宇太郎)
- ⑤『花扇—幻燈部屋下巻』(角川文庫986)
 花扇 水祭 夜鏡 あとがき
- 54 「社会文芸」≡社会党出版発行の文芸雑誌。以前は「文芸思潮」であったが、変更して「社会文芸」となった。編集人は麻生良方、発行人は浅沼稻次郎、顧問には青野季吉、新居格、小松清、金子洋文がなった。一九五一年一月十日に創刊号が出た。創刊号に火野葦平は小説「錯覚」を書いた。
- 55 麻生久≡社会運動家、小説家。一八九一(明治二十四)年五月二十四日、大分県玖珠郡東飯田村に生まれる。三高を経て東大法科卒業。一九一七(大正六)年、東京日々新聞に入社。友愛会に出入りし、黎明会結成に奔走する。一九一九年、大鑑閣より総合雑誌「解放」発刊に尽力、後に編集責任者となる。小説「濁流に泳ぐ」(一九三三年一月。新光社)、「生さんとする群」(一九三三年九月。新光社)、「黎明
- (一九二四年三月。新光社)を刊行、随想集「人生を横切る者」(一九二五年三月。新光社)、長編「父よ悲しむ勿れ」(一九三〇年十二月。改造社)もある。新居格は「麻生文学は、知性の文学ではないが、情熱のそれである」と述べている。日本労働党、社会大衆党の中心的人物として活躍した。一九四〇年九月七日死去。『麻生久伝』(一九五八年八月)、『麻生久選集』全二巻(一九四六年、七年。海口書店)がある(『日本近代文学大事典』1、講談社)。
- 56 息子≡麻生良方。麻生久の長男。『社会文芸』の編集人。
- 57 三枝伸一郎≡『九州文学』『黄金部落』同人。当時は八幡市の中学校教員。当時の住所、八幡市荒生田二丁目。早稲田大学文学部仏文学科卒業。火野葦平の推薦によって『社会文芸』一九五一年三月号に「競輪」を発表した。『黄金部落』第六号には「駆け落ち」を書いた。
- 58 「黄金部落」≡文芸同人雑誌。一九五〇年三月創刊、五三年三月(第八号)確認。季刊。編集発行人 岩下俊作。後に石山滋夫。
 小倉市江南町(当時)、後、同市北下富野、黄金部落社発行。小島直記、火野葦平、桑原圭介、上野登史郎、稲田定雄、星加輝光らが小説、随筆、詩、戯曲など執筆。小島「われらが山峡のひそかな計略」、石山「壁の世界」など毎号一〇〇枚ほどの力作に短編数編を配し構成、北九州文学運動に貢献した(『日本近代文学大事典』5、講談社)。
- 59 「新潮」新人号≡未調査。
- 60 「闇のからたち」≡未調査。
- 61 「九州文学」≡同人雑誌。一九三八年九月創刊。創刊時の編集発行人山田牙城、編集委員会責任者秋山六郎兵衛。『九州文学』(福岡)、『とらんしつと』(小倉)、『九州芸術』(福岡)、『文学会議』(久留米)四誌が大同団結して第二期『九州文学』が創刊された。太平洋戦争中は火野葦平と共に戦争に協力せざるを得なかったが、一九四五年六月の福岡空襲で休刊した。一九四六年一月には再刊して、戦後の九州における文学活動の主流となったが、一九四九年九月号で経理の乱脈のため解散した。その後、第三期は小島直記らが五十年一冊、五十一年三冊、五十二年三冊を発行、小島の上京により一九五三年六月から第四期は原田種夫が編集発行人となった。
 第五期『九州文学』(一九五五年三月発刊)まで、解散、復刊を繰り返して、一九八三年十二月、通巻四六四冊を数えて、創刊以来四十五年、ついに休刊した。その間、発行人原田種夫、編集人劉寒吉、世話人代表山田牙城の三本柱で支えて刊行してきた。阿蘇勝蔵、勝野ふじ子、矢野朗、劉寒吉、原田種夫、桜井造らが芥川賞候補となり、岩下俊作、原田種夫、劉寒吉らが直木賞候補となっている(『日本近代文学大事典』5。参考として原田種夫「記録九州文学」(梓書院、一九七四年)、復刻版『九州文学』附録がある)。
- 62 「隊商」≡同人雑誌。創刊(未調査)。編集兼発行人永松習次郎、印刷所 信濃教育会出版部、発行所 隊商同人会(東京都新宿区下落合二の六一四)。同人は第17集で三十六名、主な同人として小堺昭三、長谷健、火野葦平などがいる。小堺昭三「夏雲の下」(第17集)、小堺昭三「河」(第19集)、第23集(一九五八年三月十日発行)は、「長谷健追悼号」で、火野葦平は「長谷健化石」という追悼詩を捧げている。

43 「労働文化」―労働文化社発行。編集人は河野来吉。印刷所は中外印刷株式会社（東京港区芝公園中労委会館）。印刷人は渡辺一郎。

44 「活火山」―長編小説。『労働文化』一九五一年一月から六月まで全六回連載。一九五四年八月二十五日、単行本として『活火山』は新潮社から刊行された。

45 「小学六年生」―学年別小学生雑誌。小学館発行。本社は千代田区神田一ツ橋二一五。編集長は浅野次郎。

46 少年少女小説―長編児童小説「雲を呼ぶ笛」のと。『小学六年生』に一九五一年四月から五二年三月まで全十二回連載される。挿絵は林唯一が担当した。一九五二年七月十日、単行本として『雲を呼ぶ笛』は双葉書房（ふたばフレンド・ブックス）から出版された。

47 「女性改造」―婦人雑誌。一九二二（大正十一）年十月創刊、二四年十一月休刊。一九四六年六月復刊、五一年八月廃刊。改造社発行。あらゆる因襲を打破し、女性が不当な忍従から解放されるための言論機関として、女性の「経済的精神的自立」「個性の純なる発露」を呼びかけ、女性文化の最高水準をゆく知的啓蒙誌をめざした。敗戦後は新憲法下の男女平等の真の実現、民主主義の徹底、「女性の文化的水準、生活の権利」（『創刊の辞』山本実彦）の確保をめざして、法律、政治、経済の分野での知的啓蒙に重点がおかれた（『日本近代文学大事典』5）。当時の編集責任者は富重義人。

なお、『女性改造』に火野葦平の「魔女裁判」は掲載されていない。

48 「魔女裁判」―長編小説。『新小説』に一九四九年

十一月から五〇年六月まで八回連載され、『新小説』廃刊によって中絶され、未完のまま終わった。『女性改造』に再掲載される話もあったが、結局載らなかった。

49 「新小説」―文芸雑誌。第一期 一八八九（明治二十二年）一月〜九〇年六月。第二期 一八九六年七月〜一九二六（大正十五年）十一月。一九二七（昭和二年）一月「黒潮」と改題。一九二七年三月廃刊。復刊一九四六年一月〜五〇年六月。春陽堂発行。

50 バルザック―Honore de Balzac オノレ・ド・バルザック（一七九九―一八五〇）。フランスの小説家。フランス中部のトゥールの助役の子として生まれた。十七歳からソルボンヌ大学で法律を学び、二十歳で文学で身を立てる決心をした。事業に失敗、膨大な負債を抱え、三十歳で発表した『木菟克』（一八二九年）によってフランス文学史に登場した。『人間喜劇』はバルザックが二十年間にわたって書いた約九十編ほどの長短編小説の総称である。代表作は『ウジェニー・グラランデ』（一八三三年）、『ゴリオ爺さん』（三四年）、『谷間の百合』（三五年）、『従妹ベット』（四七年）、『従弟ポンス』（四七年）などがある。

バルザックの伝説的な多作については、一日五十杯のコーヒーを飲み、真夜中に起きて夕方六時に寝るという制作方法で、二十八年間に百五十編を書き、その分量はヴォルテールが六十一年間に書いた量に匹敵すると言われている。「印刷にならないと文が見えて来ない」と校正刷を八回も直し、超過費用を負担させられたという。佐藤春夫は「巨人バルザックのやうに」（『火野葦平選集』月報第5号、一九五八年九月、東京創元社）で「真のリアリストであっ

て同時に真のロマンティストと云へる作家も多くないが、寡聞を以てすれば、オノレ・ド・バルザックが第一に思ひ浮ぶ、さうして我が国ではわが火野葦平である。」と述べている。

51 評伝―一九五〇年当時、火野葦平が読み得るバルザックの評伝というと、クルチウス『バルザック研究』（長谷川玖一訳、建設社、一九三四年）（野上巖訳、河出書房、一九四二年）、アラン『バルザック論』（小西茂也訳、創元社、一九四七年）、太宰施門『バルザック』（甲文社、一九四九年）、水野亮『バルザック・人と作品』（一九四六年）などがあるが、そのどれであるか、未調査。

52 「青春と泥濘」―長編小説。一九四六年二月、火野葦平は「九州書房」の用紙割当に関する用務を帯び、上京した。阿佐ヶ谷に親友のロシア文学者中山省三郎を訪ね、泊る。作家藤原審爾に会ったり、改造社社長山本実彦や作家豊島与志雄を訪問、敗戦後の虚脱と混乱の東京を見て、「青春と泥濘」を書かねばならぬという思いに駆られた。「青春と泥濘」は一九四八年一月、『風雪』一月から五月まで連載したが、占領軍よりうるさく干渉があり、中断してしまつた。一九四九年三月『新小説』、同年四月『叢知』、同年十二月『風雪』に発表して完成させた。そして、一九五〇年三月、『青春と泥濘』は六興出版社より刊行された。

なお、原武 哲に「青春と泥濘」……（悲しき兵隊）への鎮魂」（『文学批評 敘説Ⅻ』（特集 火野葦平の全貌）花書院、一九九六年八月一日）がある。

53 「幻燈部屋」―連作長編小説。
第一部 幻燈部屋（『改造』一九四〇年十一月）
第二部 神話（『改造』一九四一年七月）

(一九四七年十一月)が発表され、以後連作の短編小説が次々にできた。

遠来の客が来ると、葦平は必ずこの「川太郎」に連れて来た。映画人、演劇人、作家、出版関係者、画家など三坪足らずの「川太郎」を訪れた人は多い。おでん「川太郎」を舞台にした火野葦平原作の映画には大映の「ダイナマイトどんどん」が岡本喜八監督で一九七八年十月七日封切られた。徳間康快が総指揮で、製作は俊藤浩滋・武田徹、脚本は井出俊郎・古田求・撮影は村井博、音楽は佐藤勝で、出演には加助は菅原文太、お仙は宮下順子、橋銀次は北大路欣也、岡谷源蔵は嵐寛寿郎、五味徳右衛門はフランキー堺、留吉は小島秀哉であった(鶴島正男「河伯洞発掘」裏山書房、一九九三年十二月二十日改訂版)。

注12参照のこと。

37 佐々木孝丸は演出家、俳優、劇作家、翻訳家、エスペランティスト。一八九八(明治三十一年)一月三十日北海道釧路市に生まれる。アテネ・フランセに通い、第二次「種蒔く人」同人、社会主義同盟、「労芸」に参加。秋田雨雀の脚本朗読会「土の会」、先駆座(土蔵劇場)、トランク劇場、前衛座、左翼劇場を経て、プロット初代執行委員長となる。主な演出は小林多喜二の『不在地主』、三好十郎の『炭塵』『斬られの仙太』など。戯曲に『地獄の審判』『筑波秘録』『板垣退助』がある。翻案劇に『荷車』『密偵』『巴里を焼く』『マルチネの夜』『クラルテ』など。戦後は養子千秋実の「薔薇座」に関係したが、晩年は映画テレビ俳優として活躍した。落合三郎の名の戯曲集『慶安太平記後日譚』や『風雪新劇志』がある。佐々木孝丸の「新遊俠伝」脚本ができたかどうかは不明。一九八六年十二月二十六日歿。

38 新国劇は大衆劇団。沢田正二郎が早大在学中、坪内逍遙の文芸協会に入り、島村抱月の芸術座に参加したが、抱月、須磨子へ反発して退座し、倉橋仙太郎らと新しい国民劇の樹立をめざして、一九一七(大正六)年四月、東京新富座で旗揚げした。しかし、経営に失敗、松竹の白井松次郎に拾われ、大阪浪花座で大衆演劇に徹することになった。座付作者行友李風、立師段平を得て、李風の『月形半平太』『国定忠治』で人気は最高潮に達した。一九二一(大正十)年六月に東京に進出、明治座で『父帰る』『国定忠治』で人気を拍し、浅草の公園劇場で中里介山『大菩薩峠』で大好評、『清水次郎長』『白野弁十郎』『勧進帳』『沓掛時次郎』などの成功作がある。一九二九年、大仏次郎「赤穂浪士」上演中、沢田は中耳炎が悪化、三月四日死去。沢田死後、島田正吾、辰巳柳太郎を抜擢して成功した。戦後は『王将』『森の石松』『平手酒造』『宮本武蔵』など名言を出して大衆劇場の頂点に立った。しかし、テレビの影響を受けて経営が苦しくなり、島田、辰巳の老年化が問題となり、一九七九年、一度倒産、その後再建したが、八七年創立七十周年を機に解散となった。

なお、新国劇が「新遊俠伝」を興行したことはない。島田正吾は『九州文学』一九六〇年四月号「火野葦平追悼」の中で、「結局、新国劇で上演した火野さんの作品は、「麦と兵隊」「土と兵隊」だけにとどまった。新国劇と肌の合いそうな火野さんの作品が、この二つの兵隊ものだけだったというのは、われひと共にちょっと不思議な気がする。」と書いている。

39 辰巳は舞台俳優辰巳柳太郎(一九〇五—一九八九)。一九二七年、新国劇に入座、「井伊大老の死」の駕

籠かきが初役。二九年創始者沢田正二郎の急死後、島田正吾と共に大抜擢、後継者の道を歩み、新国劇の隆盛を導く。国定忠治、宮本武蔵、机籠之介、坂田三吉、無法松などが当たり役。芸風は天衣無縫で豪放。新国劇解散後は東宝系列劇場、明治座に出演。映画テレビでも活躍。

40 島田正吾。一九〇五年十二月十三日、横浜市生まれ。二十三年新国劇に入座。「井伊大老の死」の駕籠かきで初舞台。沢田正二郎の死後辰巳と共に後継者に抜擢され、「白野弁十郎」「沓掛時次郎」で好演、新国劇の基礎を築いた。「関の弥太っぺ」「国定忠治」の股旅物を十八番とし、「閣下」「霧の音」を手がけ、五十八年「ピルマの竖琴」をヒットさせた。映画は松竹・新東宝・日活・大映・東宝・東映に出演した。新国劇解散後はテレビにも出演した。菊池寛賞、坪内逍遙大賞を受賞。

41 「月刊読売」は文芸雑誌。読売新聞社発行。五一年三月から二月二回、十一月から「旬刊読売」に改名。本社は中央区銀座西三十一。編集長は大河内敏夫。42 「私版金色夜叉」は長編小説。「月刊読売」一九五一年一月号から十一月十一日号まで連載された。挿絵は濱野政雄が描いている。

一月号の目次に宣伝文が次のように紹介されている。「金、金、金の世の中を、金に憑かれて動き、狂い、のたうつ人間——追放解除となった火野葦平氏が新春筆硯も新たにその政治的開眼の気魄を世に問う構想雄大な諷刺小説の第一作！これは単なる明治の金色夜叉の昭和戦後版に非ず、ロマンの新風が浮彫する万華の世相が痛烈な描写に転変す。」

同年十一月二十五日、単行本として『私版金色夜叉』が湊書房から刊行された。

とある。しかし、八月十五日、ポツダム宣言受諾で敗戦、十七日、報道部は解散になった。

27 ライフ・ワーク 鶴島正男の『檻樓の人』評伝・

火野葦平（裏山書房、一九九五年六月十日）によると、『革命前後』は、『麦と兵隊』『青春と泥濘』

「花と竜」とともに、ライフ・ワークの一つである

ばかりでなく、葦平文学の総決算として書かれたフシが濃厚である、と思われてくるのである。」とあ

る。『革命前後』の題名は、若き日に憧れた島田清

次郎の戯曲集『革命前後』（大正十一年八月十三日、改造社）に拠ると推定される（『文学批評 敍説』Ⅻ

「新編 火野葦平年譜」鶴島正男、花書院、一九九六年八月一日）。

「革命前後」の主人公辻昌介は作者火野葦平をモデルとし、『九州文学』同人たちもそれぞれ仮名を

付けられて登場している。劉寒吉は笠健吉、岩下俊

作は今下仙介、高田保は高井多門、中山省三郎は山

中精三郎、原田種夫は松坂幸夫、長谷健は細谷俊、

東潤は西仁、河原重巳は山原松実、古海卓二は伏見

竹二というように、指摘することができる。

28 「新潮」 文芸雑誌。一九〇四（明治三十七）年

五月創刊、一九四五年三月休刊したが、同年十一月

から復刊、現在に至る。新潮社発行。本社は新宿区

矢来町七一。社長は佐藤義夫。編集長は斎藤十一。

なお、一九五一年二月号に火野葦平の小説はない。

五月号には「虎の山」を書いている。

29 「小説新潮」 文芸雑誌。一九四七年九月創刊、

現在に至る。新潮社発行。「通俗に墮せず、高踏に

流れず」中間小説のジャンルを開発、小説の大衆化

に成功した。当時の編集長は佐藤俊夫。

葦平は一九五一年一月から「新遊俠伝」シリーズ

の第二弾を発表した。一月号に「泥鰌」を掲載した。四月号に「海師」、九月号に「象供養」、十二月号に

「兵六玉物語」を発表した。

30 加助、留吉、お仙 新遊俠伝 シリーズの主要な登場人物。加助と留吉は九州若松の博徒（やくざ）。

憎めない任侠の徒。二人ともお仙に惚れている。お

仙は若松のおでん屋「川太郎」の男勝りの女将。注

13 参照のこと。

31 「新遊俠伝」 九州若松のおでん「川太郎」を舞台にした現代版の任侠物語。短編小説の連作。注9

参照のこと。

32 別冊 別冊小説新潮 のこと。文芸雑誌。新潮社発行。

33 「あひる座」 別冊小説新潮 一九五一年一月号に掲載された「新遊俠伝」シリーズの一つ。「あ

ひる座」は一九四七年若松の大学生を中心として、河原重巳の指導により結成された劇団「かもめ座」

をモデルにしている。若松の毎日座で第一回公演を

行い、「ドモ又の死」「地蔵経由来」を演じた。アマ

劇団であったが、毎日座を満員にしたという。一九

五〇年には演出家土方與志を招聘している（『北九州市史』近代・現代 教育文化 一九八六年十二月

十日）。なお『別冊小説新潮』五月号には「新遊俠伝」シリーズの一つ「名所案内人」が発表されてい

る。

34 鷗座 「かもめ座」のこと。注33参照のこと。

35 土方與志 演出家。一八九八（明治三十一）年四月十六日東京に生まれる。学習院、東大国文科卒。

小山内薫に入門、ベルリン大学に留学、築地小劇場

を起す。小山内薫歿後、新築地劇団を組織、一九

三三年五月フランスへ逃避、ソ連作家大会に出席し

たため、伯爵位を剥奪された。一九四一年ソ連より

帰国と同時に逮捕、懲役五年の判決を受け、仙台刑

務所に服役中、敗戦により釈放される。出獄後は日

ソ文化連絡協会会長、NHK嘱託、舞台芸術学院副

校長に就任。東宝の演出、映画にも出演した。一九

五七年訪中新劇団長。一九五九年六月四日、肺ガン

で死去。六十一歳。

土方與志は一九五〇年招かれて「かもめ座」の指導

をしていく。火野葦平の小説「あひる座」では土

方與志をモデルとした「辻形裕二」の偽者が登場し

ている。

36 若松おでん川太郎 ここでは若松のおでん川太郎

の偽者がお仙をくどくのである。

若松のおでん川太郎の女将は、葦平自殺前夜に葦

平からの呼び出しの電話に応じて河伯洞（葦平の若

松の自宅）に出かけて一緒に飲んだ青野玉喜である。

一九四六年七月、北京から若松に引き揚げ、十二月

生活のためおでんの屋台を開いた。客の若松市長井

上安五郎は屋台の店名がないので、火野葦平を紹介

した。青野が葦平に屋台の命名を切り出すと、葦平

は博多でおでん屋をやるつもりだったが、できなくな

った。暖簾も爛びんもできていく。自分のやろう

と思っていた「川太郎」でやたらどうか、と言っ

た。葦平は準備していた用具類をすべて青野に与え

て、若松のおでん「川太郎」は出発した。一九四八

年若戸大橋若松側に新築された十軒長屋の、左から

三軒目に三坪ほどの店を構えた。暖簾から箸袋、マ

ツチのデザインに至るまで葦平得意の河童や小唄で

山根寿子、三好栄子、長浜藤夫、杉葉子、藤田進、利根はる恵、木村功、千秋実、佐々木孝丸、伊藤雄之助、清水将夫らであった（前記『日本映画作品事典』）。

19 パージ解除Ⅱ葦平は一九四八（昭和二十三）年四月五日、連合国占領軍による公職追放仮指定を受けたので、志賀直哉らは、火野はヒューマニストであること、戦争によって私利を貪ろうとしたわけではないこと、戦後の日本に欠くことのできない人物であることなどを理由にあげて、内閣総理大臣芦田均あてに追放から除くように嘆願書を提出した。しかし、その効もむなしく、六月二十五日、尾崎士郎、林房雄らと共に公職追放を受けた。追放後は政治性のある作品、新聞連載、放送、映画、芝居、ラジオなどの関わりは、制約を受けることになった。一九五〇年十月十三日、公職追放を解除され、新聞連載も自由に行えるようになった。

20 文芸通信社Ⅱ未詳。

21 北海道タイムスⅡ『北海タイムス』が正しい。一九〇一（明治三十四）年九月三日創刊。『北海道毎日新聞』『北門新報』『北海時事』の三紙が合併したもの。本社は札幌市中央区大通西三丁目一番地。代表者は菊池吉治郎。

なお、火野葦平が『北海タイムス』夕刊に連載した小説は、「街の燈台」で挿絵は浜野政雄、一九五一年二月十六日から始まった。

22 山陽新聞Ⅱ本社は岡山市下石井三九七。代表者は谷口久吉。『山陽新聞』には、一九五一年一月から四月まで火野葦平の小説は、連載されていない。

23 南日本新聞Ⅱ本社は鹿児島市易居町二番地。代表者は武田勝市。『南日本新聞』朝刊では、「街の灯」

という題になっており、同年二月三日から連載が始まっている。この『街の灯』は一九五二年九月、「傑作長篇小説全集（第二期）3」として大日本雄弁会講談社から出版された。

24 「改造」Ⅱ総合雑誌。一九一九（大正八）年四月創刊、一九四四（昭和十九）年六月休刊、一九四六年一月復刊。一九五五年二月（第三十六卷第二号）廃刊。全四五五冊。改造社発行。創刊当時の編集人は横関愛造（利藤太）。大正デモクラシー昂揚期中で創刊され、大正末から昭和初期にかけて『中央公論』と並ぶ総合雑誌の両翼的存在だった。昭和初期ごろは評論創作とも進歩的左翼主義的色彩が強かったが、もともと山本実彦社長の民族主義的要素も強く、国家意識、東洋主義の考えが底辺にあったと言われている。太平洋戦争突入後、時局的色彩を強め、軍部の圧力で廃刊に追い込まれた。戦後復刊したが、かつての活力はなく、内紛を重ねた末、廃刊した。本社は中央区京橋一―三。社長は山本実彦。当時の編集責任者は小野田政。

なお、火野葦平は『改造』一九三八年八月号に出世作「麦と兵隊」を発表して、一躍兵隊作家として注目を浴びた。だから、葦平としては、ライフワークは『改造』から出したい思いがあったのだろう。しかし、何らかの事情で、『改造』から発表されず、

八年後、一九五九年五月から十二月まで全八回、『中央公論』から「革命前後」という題で発表された。

25 「鎮西兵団」Ⅱ「革命前後」のことであろう。一九三八年二月、思いがけず「糞尿譚」で芥川賞を受賞した火野葦平は、中支派遣軍報道部に転属を命ぜられ、徐州会戦に従軍、同年八月「麦と兵隊」を『改造』に発表、兵隊作家として脚光を浴びた。しかし、

敗戦後は戦犯作家として罵られ、兵隊物の印税で蓄財したと疑われた。葦平は一切弁解せず、戦中と戦後にわたって彼自身が変節したか否かを、葦平は己れに問い詰めようとした。それが本書簡の直前に発表した「追放者」（一九五〇年十二月、『改造』）である。そして彼の思いのたけを集中的に注入した大作「鎮西兵団」を『改造』に発表したかったのである。しかし、前述のように何らかの事情で八年後しか発表できなかった。

26 西部軍報道部Ⅱ原田種夫の『実説・火野葦平——九州文学とその周辺——』（大樹書房、一九六一年七月三十日）によると、「西部軍報道部が発足したのは、（昭和二十年）七月七日であった。これは一種の文化人報道部であって、町田（敬二・大佐）報道部長と火野の合作といえよう。地元の文化人は火野が人選したものであった。劉、岩下、東潤、古海（卓二）、長谷（健）、河原（重巳）、山田栄二、田中善徳、中山省三郎、それにわたし（原田種夫）などが白紙の徵用令書をもった。町田の關係で、高田保、鈴木安蔵、与田準一、熊谷久虎、吉村廉も加わった。現役の兵隊からは久留米師団にいた画家の寺田竹雄伍長、シナリオ作家の陶山哲上等兵は志布志から転属させられた。

国民精神の振興と宣揚に文化人を利用するのが目的だった。宿舎は（福岡市）渡辺通三丁目山本アパート（現・セントラルホテル・福岡）で、わたしたちはみな個室をもらった。佐官待遇であった。事務所は西日本新聞社の講堂が接収されてそれに当てられた。

仕事としては、壁新聞の作製、朝の放送の原稿執筆といったところで、これという仕事はなかった。」

る濃い眉毛にガッチリした骨組みの身体、古風なほかに素朴で武骨な動作と喋り方など、そうした藤田の男性的で単純素朴さが生んだ良さ」(『日本映画人名事典』キネマ旬報社、一九九六年十月)と評された。一九九〇年三月二十三日肝臓ガンで死去。七十八歳だった。

11 四月封切映画「新遊侠伝」は製作・配給は新東宝で、一九五一年五月五日封切であるから、予定より若干遅れている。製作は永島一朗、脚本は八田尚之、監督は佐伯清、撮影は河崎喜久三、音楽は清瀬保二、美術は加藤雅俊である。出演は藤田進・花井蘭子・小堀誠・森繁久弥・進藤英太郎・山本礼三郎・伊藤雄之助・永井柳太郎などであった。前後編二つに分けられた。なお「新遊侠伝」は日活からも一九六六年十一月二十日封切。斎藤武市監督の下、小林旭・高橋英樹・嵯峨三智子・初井言栄出演で再映画化された(日本映画史研究会編『日本映画作品事典 戦後篇(1)第Ⅱ巻』科学書院、一九九八年六月二十五日)。

12 川太郎Ⅱ一九四五(昭和二十)年八月十五日、日本の敗戦後、火野葦平は敗戦の衝撃で虚脱状態になり、ペンを折る決心をした。しかし、玉井家の長男勝則(葦平)は一家を背負わなければならなかった。同年六月福岡市那珂川畔の東中洲五丁目松島屋旅館は空襲で焼失した。同年十月、その跡地に、味のデパート「太平街」を建設しようとした。葦平はおでん「あし平」を開店するつもりで奔走した。「おでんあし平はやや露出の傾向あるにつき『河太郎』とすへ十一月一日決心」(火野葦平「押切帳」とあり、さらに「川太郎」に改名した。しかし、この計画は一九四六(昭和二十一年一月)になっても開店

に至らず、資金不足、資産移動禁止令、食糧事情逼迫と新食堂不許可方針によって「太平街」建設は挫折し、「おでん川太郎」は水泡に帰した。間もなく葦平の好意で、調度類をすっかり譲り受けた青野玉喜は「おでん川太郎」の店を若松に開いた。後年、この店が「新遊侠伝」の舞台になったのである(へ鶴島正男『檻樓の人 評伝・火野葦平』一九九五年六月十日、裏山書房)へ城戸洋『河童憂愁―葦平と昭和史の時空―鶴島正男聞書』西日本新聞社、一九九四年十月二十五日)による)。

なお、「川太郎」は東京都と京都市東山にもある。注36参照のこと。

13 留吉Ⅱ「新遊侠伝」シリーズの主人公加助の弟分のやくざ(若松のばくち打ち)。映画「新遊侠伝」では小堀誠が演ずることになった。

14 轟夕起子Ⅱ映画女優。一九一七(大正六年)九月十一日、東京都麻布区新堀町に生まれる。宝塚少女歌劇団のスターから日活に入り、一九三七年六月尾崎純監督「宮本武蔵」で注目を集め、千葉泰樹監督「美しき鷹」で近代的な聡明さ、華麗さ、奔放な明るい女性を演じて人気を博した。「陽気眼鏡」、「姿三四郎」、「肉体の門」、「細雪」で好演した。一九六七年五月十一日、東京都狛江で死去。四十九歳。

なお、轟夕起子は「新遊侠伝」には出演せず、お仙の役は花井蘭子が演じた。

15 連載Ⅱ「赤道祭」のこと。火野葦平は一九五一(昭和二十六)年三月十一日から八月十九日まで一六二回、『毎日新聞』(朝刊)に新聞小説「赤道祭」を連載した。公職追放が前年一九五〇年十月十三日解除されたことによって、新聞連載の道がひらけたのである。ウナギの生態を調べるため、東京大学教授末

広恭雄博士、九州大学教授内田恵太郎博士の教示を受けた。一九五一年十一月十日、単行本『赤道祭』(新潮社)として出版された。なお、一九五一年十二月、「赤道祭」の中で佐賀県有田に二つあった柿右衛門焼の一つ小畑秀吉を「二七柿」と書いて、名誉毀損で訴えられ、損害賠償を要求される。劉寒吉の助力で弁護士末松菊之助に委嘱して対抗した。この裁判は足かけ七年かかって解決した。その経緯は葦平の「二人柿右衛門」(『芸術新潮』)に書いた。

16 石川達三Ⅱ小説家。一九〇五(明治三十八)年七月二日、秋田県生まれ。早大英文科中退。「蒼氓」で第一回芥川賞を受賞した。一九三八年三月、「生きてゐる兵隊」で筆禍事件を起こした。戦後、「人間の壁」、「四十八歳の抵抗」、「金環蝕」などの作品がある。私小説手法を否定し、心境小説から脱却し、時代と社会の波の中に翻弄される人間の生き方を描いた。

17 「風」にそよぐ葦Ⅱ長編小説。前編は『毎日新聞』(朝刊)一九四九年四月十五日から十一月十五日まで二二二回、後編は『毎日新聞』(朝刊)一九五〇年七月十一日から五一年三月十日まで二四二回連載された。一九四四(昭和十九)年七月、中央公論社と改造社とが自発的廃業を強制された横浜事件を、特に中央公論社と社長嶋中雄作(作中では新評論社と葦沢悠平)を中心に描いた。英国に留学した理想的自由主義者葦沢が敗戦前後の歴史的激動に挫折した姿を描き、個人主義や自由主義の限界を批判した。

18 映画化Ⅱ映画「赤道祭」は、製作・配給は東宝、一九五一年十二月七日封切られた。製作は田中友幸、脚本は棚田吾郎、監督は佐伯清、撮影は山田一夫、音楽は清瀬保三、美術は安部輝明、出演は伊豆肇、

れる、といふ噂ばかりきいてゐるが、稿料はらはぬ
ことで成りたつてゐるらしい。講談社とはほとんど
関係がないのである。

○先日、必要あつて、君の小説集「世間ばなし」の頁
をくつてゐて、君のいくつかのよい作品をよみかへ
し、奇妙な感慨をおぼえた。君が本式の仕事をす
ることを熱望する心、切。

○矢野朗は、吉井で、「砂地獄」といふ、千絵女との
結婚生活をテーマにした小説をかいてゐるらしい。
僕も、今、「夫婦」をかいてゐる。これは、「群像」
二月号に出る筈。百二十枚。今夜、それで、これか
ら徹夜。

○単行本「日本艶笑滑稽譚」「昭和鹿鳴館」送つた。
年末に、創元社版「追放者」が出る。

○では、奥さんよろしく。「十二月九日」。葦平
○てがみおくれ。

二伸、「近世快人伝」到着したが、某雑誌へ、連載の
約束した「玄洋社」は、いろいろ考へた末、やめた。

四

〔注解〕

- 1 小倉市魚町＝劉寒吉の住所は当時の「小倉市魚町
二丁目三十三番地」。現在の福岡県北九州市小倉北
区魚町二丁目四番二十一号。北九州市最大の繁華街。
2 ハマダヤパン＝「ハマダ」は劉寒吉の本名の姓「濱
田」。パン屋は劉寒吉の家業。江戸時代は小倉藩小
笠原家の砂糖御用達商人で、魚町の町年寄を務めた
家柄だった。

- 3 東京都大田区池上徳持町七＝火野葦平は九州若松
と東京間の往復が頻繁になつたので、一九四九（昭

和二十四）年三月十四日、大田区池上徳持町七番地
（電話、池上（95）〇六二三番）の借家を借り、長
谷健夫妻を一階に住ませ、上京の折りに二階を用
いることにした。家主が筑後柳川のドンコ採り名人
だったので、「鈍魚庵」と命名した。

4 女房＝玉井ヨシノ。一九三〇（昭和五）年、葦平
は当時若松の芸者徳弥（父・山本只吉、母・フクノ
の四女。日野徳七の養女。十九歳）と称していたヨ
シノ（良子）と恋愛の末、双方の親の反対にあつて
かけ落ち。同年八月十三日、若松市老松町の小さな
隠れ家で仮祝言をあげた。同年十月一日、玉井勝則
（葦平）は日野ヨシノと婚姻届出。一九七二年一月
二十四日、脳軟化症のため、死去。

5 小田＝小田雅彦。九州における火野葦平の秘書。
東京には小堺昭三が秘書をしていた。

6 「炎の記録」＝劉寒吉著。一九四八年十月、新太
陽社から刊行。その後一九四九年四月二十日、あさ
出版から再刊された。序章海港にして 第一章 吹
雪物語 第二章 青春と孤独 第三章 海の門 第
四章 黒死病 結章 炎上の詩 後記。

なお、劉寒吉原作「炎の記録」の映画化は成らな
かった。

7 黒岩義嗣＝未調査。

8 三上氏＝三上良二か。三上良二は映画監督。一九
〇四年八月二十五日生。法政大中退。日活関西撮影
所現代劇部監督部入社。三枝源次郎に師事。二八年
マキノ正博の助監督となり、認められて監督に昇進、
「新聞」でデビュー。「スキー行進曲」「級友」「須
磨の仇浪」「真田十勇士」などあらゆるジャンルを
器用にこなした。三三年木下トキキで「ホロリ涙
の一雫」を撮る（『映像メディア作家人名事典』日

外アソシエーツ、一九九一年十一月十二日）。

9 「新遊俠伝」＝短編小説集「新遊俠伝」ジブ社、
一九五〇年十二月二十日。所収作品と初出。

①「昼狐」＝『小説新潮』一九四七年十一月号。

②「枯木の花」＝

③「神様乞食」＝

④「玉手箱」＝

⑤「松竹梅」＝『小説新潮』一九四九年一月号。

⑥「羅生門」＝『小説新潮』一九四九年四月号。

⑦「馬と鴉」＝『小説新潮』一九四九年九月号。

⑧「野球と蝙蝠」＝『小説新潮』一九五〇年一月号。

⑨「犬部落」＝『小説新潮』一九五〇年五月号。

⑩「金看板」＝『小説新潮』一九五〇年九月号。

なお、火野葦平は一九五三年二月十日、ジブ社
版「新遊俠伝」に五編（泥鰌、「あひる座」「海師」
「象供養」「名所案内人」）を追加して、『定本新遊
俠伝』（小説朝日社）を出版した。

10 藤田進＝映画俳優。一九二二（明治四十五）年一
月八日、福岡県久留米市京町生まれ。南筑中学校卒
業。東宝に入社、一九四〇年三月、佐藤武監督「妻
の場合」に主演として抜擢される。木村莊十二監督
「海軍爆撃隊」、島津保次郎監督「二人の世界」に
主役となる。山本嘉次郎「ハワイ・マレー沖海戦」、
黒沢明監督「姿三四郎」で名を広めた。山本監督「加
藤隼戦闘隊」で軍人スターとして人気を高める。黒
沢明「虎の尾を踏む男達」で敗戦、今井正「民衆の
敵」、黒沢明「わが青春に悔なし」で好演した。新
東宝に移り、「富士山頂」で主演。フリーとなつて
からは黒沢明「隠し砦の三悪人」、「悪い奴ほどよく
眠る」、「用心棒」、「天国と地獄」などに出演した。
「二枚目スター」には珍しく、太く意思力を感じさせ

生は、二十五日、六日ごろ。

○写真機をありがたう。小田が朝日便で送ってくれたので、こちらで大変役立つ。やっぱり、カメラがないと困ることがある。

○「炎の記録」を映画にするやう、もう一度あらたに研究されてゐる。東宝のプロデューサーが、このごろときどき来るが、具体的にいつ来たとのこと。黒岩義嗣君といふのが、三上氏（まへに君のところへ行つた人）と協力してやうだ。早くきまればよいと思ふ。（五万円の内金はもう失効、もらひばなしでよろしからうとのこと。）

○「新遊俠伝」は、大映、藤田進主演で、二月に撮影、四月封切の予定。藤田進とこのごろよくのむ。いづれ、九州へロケしたいとのこと故、そのころは北九州はにぎやかになるだらう。この映画には、小生も出演してくれとのこと。セリフはいはず、川太郎でのむところだけ。どうか、ちよつと出らんか。留吉は、まださまらんが、お仙は藤夕起子の由。

○毎日新聞に、連載かくこときまつた。石川達三のあとである。「風にそよぐ葦」で、だいぶん肩がこつたらしいから、肩のこらぬユーモアに富んだものをつとのこと。小生も、石川のやうな題材を、別の角度からかきたいのだが、同じやうなものがつづくのも困るだらうから、とくいのこつつけい小説を書かうかと考へてゐる。しかし、意図は、むろんまじめで、日本人に勇気をあたへるやうな作品にしたいと念願してゐる。石川君のが二月一杯くらゐらしいので、僕のは三月はじめから。また、なにかと協力してもらひたい。もう、東宝で映画決定。

○前から（パージ解除前から）話のあつた文芸通信社の新聞連載をかかばならぬ。これは、有力地方紙

のいくつかにのるもので、北海道タイムス、山陽新聞、南日本新聞、その他といふやうなものらしい。これは、一月末か、二月はじめから。

○「改造」に、四月号から連載をかく。これに、いよいよ「鎮西兵团」をかくつもり。これには、君たちの絶大の協力を得たい。西部軍報道部時代、終戦前後、これは僕のライフ・ワークとした主題である。「新潮」二月号から、隔月連載一年。これは、現代の講談である。

○「小説新潮」は一月号から、隔月、御存知、加助、留吉、お仙の「新遊俠伝」、これは小説新潮がつづくかぎりつづくのである。別冊には「あひる座」をかいた。あひる座は鷗座、土方與志、若松おでん川太郎をくどくの段である。「新遊俠伝」は、佐々木孝丸脚色で、新国劇で芝居になる。加助の辰巳、留吉の島田である。来春興行。

○「月刊読売」に、「私版金色夜叉」連載一年。もう新年号出た。現代のゼニの鬼ども、高利貸、守銭奴、捨銭奴、金のテーマをいろいろに追求する諷刺小説。この雑誌は、三月号から、月二回発行になるらしい。「労働文化」に、「活火山」連載半年。新年号、もう出た。

○「小学六年生」に、新学期四月号から、少女少女小説、連載一年。

○「女性改造」に、「魔女裁判」連載三年。これは、「小説」にのせてゐたのが中断されたので、あらためて最初からのせて続ける。第一回がいつになるか、まだ、はっきりきまつてゐない。

○以上が連載として、今のところきまつてゐるものだが、このほか、短篇をときどき書く。いよいよ、りんでんきを本格的にうごかすことになる。力のつづ

くかぎり、ペンのつづくかぎり、書く。バルザックの評伝をよむと、「彼の頭のなかにある五十台もの機関車が一度にうごきだしたやうに」と、その仕事ぶりを評してゐるが、むろん、僕などは、バルザック先生の足もとにも及ばない。しかし、五台くらゐの小型機関車を一度にうごかす決心はしてゐる。バカな無理はしたくないが、もつてゐるだけの力はぶちまけたい。まだまだ、ほんとうのものはかいてゐないし、バラドックスでなく、僕は新人だと考へてゐる。火野葦平論ができるのも、これからの仕事によるものと信じてゐる。「青春と泥濘」や「幻燈部屋」も、機会を見つけて、かきつきたい。

○今度、「社会文芸」といふ雑誌が出る。どうも社会党文化部あたりの仕事らしい。麻生久の息子がやるとのこと。これに、新人を一人とたのまれたので、いろいろ考へた末、三枝伸一郎にかくやう、電報打つた。早稲田系らしいので。君からもよいものをかくやう、激勵してくれ。二十日まで、四十枚。

○「黄金部落」三号の出るのを待つてゐる。「新潮」新人号に落第したのは残念だったが、「闇のからたち」では、仕方がなかった。部落からせひ新人をとび出させなくてはいけない。「九州文学」もやつと出たらしく、送つてきたが、なかなか堂々としてゐる。表紙がまづいが、まづ、これだけでよければ、上等。鼻いきも荒い。「隊商」も、近く二号が出る。（どうも、ゼニが集まらず、同人費おくれすまぬが、二三日中、一万円送る。）

○講談クラブに連絡したら、近くのせますとのことだった。「富士」はかいたか。まだであつたら、やめたがよい。原稿料はくれない。タダでもいいなら別だが。小生の四月号の稿料まだくれない。もうつづ

Handwritten text in a rectangular frame, likely a manuscript page. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines. The script is a cursive style, possibly from a South Asian or Middle Eastern tradition. The page is heavily shadowed, particularly on the right side.

Handwritten text in a rectangular frame, likely a manuscript page. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines. The script is a cursive style, possibly from a South Asian or Middle Eastern tradition. The page is heavily shadowed, particularly on the left side.

Handwritten text in a rectangular frame, likely a manuscript page. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines. The script is a cursive style, possibly from a South Asian or Middle Eastern tradition. The page is heavily shadowed, particularly on the right side.

Handwritten text in a rectangular frame, likely a manuscript page. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines. The script is a cursive style, possibly from a South Asian or Middle Eastern tradition. The page is heavily shadowed, particularly on the left side.

が出版された。劉寒吉年譜としては『岩下俊作・劉寒吉―九州文学の先駆者 二人の偉大な軌跡』（北九州市教育委員会、一九九六年二月一日）所収の「年譜」が最も詳しい。

ところで、野田宇太郎と劉寒吉はいつから交流が始まったのであろうか。はつきりとした確証はないが、一九三二（昭和七）年劉寒吉、岩下俊作、辻旗治らが小倉で発行した詩誌『とらんしつと』に、一九三四（昭和九）年十月、星野順一（辻旗治）に誘われて火野葦平が加盟した。一方、野田宇太郎は同年、丸山豊らと「ポアイエルのクラブ」を結成、『行動』の懸賞詩に野田の「蝶を追ふ」が第一席となり、『文藝汎論』『詩法』の同人に推挙され、詩活動を活発化させていた。

従って、劉、岩下、火野らの『とらんしつと』に拠る北九州勢と丸山、野田らの筑後勢との間には自然と情報交流が生まれたと思われる。同年二月、福岡市西中洲で九州詩人祭が行われ、劉寒吉、原田種夫、山田牙城を中心に丸山豊も参加したが、野田宇太郎、火野葦平は参加した形跡がない。しかし、このころ、劉と野田とが出会い、知り合ったであろうと思われる。野田宇太郎文学資料館に所蔵されている野田宛の劉寒吉書簡は封書十四通、はがき二十六通が保管されている（『野田宇太郎蔵書目録』では「書簡一二通、はがき一六枚」とあるが、実際にはこれ以上存在していた）。これらの書簡のうち、一番古いものは、一九四三（昭和十八）年十月二十七日付（二十八日消印）で、宛先は「東京都麹町区三番町一 第一書房さま内 野田宇太郎様」となっている。一九四〇（昭和十五）年、小山書店に入社するため上京した時、野田は小倉の劉宅に立ち寄った。既に食糧難の兆があった時代だったので、劉は野田に自家のパンを「持って行け」と勧めた。

野田はそのパンをカバンに詰めながら、「これだけあれば、東京で餓死することもあるまい」と笑いながら出発した（劉寒吉「野田宇太郎の訃報を聞く」『わが一期一会』下、創思社出版、一九八五年五月一日）。『新風土』の編集に携っていた野田宇太郎は、一九四二（昭和十七）年第一書房に移り『新文化』を編集、一九四四（昭和十九）年四月河出書房に入社、『文藝』の責任編集者となった。野田は一九四三年『詩撰集 いくさのには』を豊国社から出版、劉寒吉に贈っている。以上から類推すると、野田と劉との出会いは一九三四年前後と思われる。

三

本稿で公開する書簡は、次のようなものである。

○一九五〇（昭和二十五）年十二月九日付封書速達（消印 蒲田 25・12・11 前8―12）受取消印（小倉 25・12・13 前0―8）

¹ 小倉市魚町

² ハマダヤパン

劉寒吉 様

速達

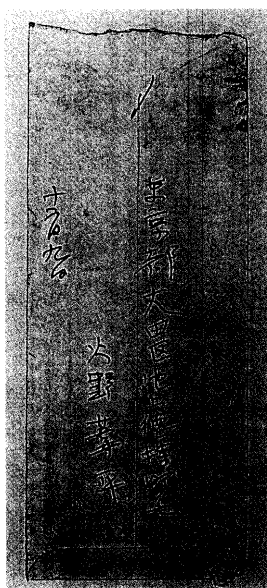
³ 東京都大田区池上徳持町七

火野 葦平

十二月九日

寒吉どの、

○滞京、三ヶ月になんなんとしてゐる。女房もきてから一ヶ月になった。十二日の汽車でかへる予定。小



一九五〇年十二月九日付
劉寒吉宛火野葦平書簡

- (5) 「野上豊一郎・弥生子書簡の紹介——野田宇太郎
文学資料館所蔵書簡翻刻(4)——」『福岡女学院短
期大学紀要』第三十三号(一九九七年二月)
- (6) 「火野葦平の書簡(2)——野田宇太郎宛葦平書簡の
紹介——」『文学批評 叙説』第十五号(一九九七
年八月)
- (7) 「火野葦平の書簡(3)——野田宇太郎宛葦平書簡の
紹介——」『文学批評 叙説』第十六号(一九九八
年二月)
- (8) 「阿部知二・伊藤整・宇野浩二書簡の紹介——野
田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻(5)——」『福岡
女学院短期大学紀要』第三十四号(一九九八年二
月)
- (9) 「中河与一書簡の紹介——野田宇太郎文学資料館
所蔵書簡翻刻(6)——」『福岡女学院短期大学紀
要』第三十五号(一九九九年三月)

二

今回ここで発表しようとする劉寒吉宛火野葦平書簡
一通は、どういうわけか、野田宇太郎文学資料館所蔵
のものであって、何故に『九州文学』同人劉寒吉宛の
火野葦平書簡が野田宇太郎の手中に入ったか、不明で
ある。劉寒吉は一九〇六(明治三十九)年九月十八
日、小倉市魚町五十番地(現・北九州市小倉北区)に
生まれた。本名は濱田陸一。一九二〇年小倉市立小倉
商業学校(現・福岡県立小倉商業高等学校)に入學。
三年の時、ガリ版の文芸誌『梧桐』を発行。小倉の天
神島小学校以来の友人である小倉工業学校生徒の古田
三平(後に「富島松五郎伝」へ映画「無法松の一生」
の原作者)で直木賞候補となった岩下俊作)らと杉原

碌介(劉寒吉)の名で一九三三(大正十二)年四月、
同人誌『公孫樹』を出した。一九三二(昭和七)年、
岩下俊作、辻旗治(星野順一)、中村暢らと詩誌『と
らんしつと』を創刊した。そのころ抒情詩、自由詩な
ど詠嘆調の詩が多かったが、劉たちはイタリヤ未来派
に共感し、もっと社会を反映した、ダイナミックな詩
を書こうとしていた。それが警察から社会主義運動者
と見なされ、追われたりした。第十七号には岩下が「汎
力動詩派宣言」を書いた。一九三四(昭和九)年二月
「九州詩人祭」が開かれ、九州文学者の大同団結が計
られ、九州芸術家連盟が結成され、七月に『九州芸術』
が創刊、その中心となったのが、劉と原田種夫であつ
た。一九三八(昭和十三)年九月、九州の有力同人誌
四誌が合併して、第二期『九州文学』が創刊され、劉
も原田と共に編集委員となった。劉は詩より小説に転
じ、一九三九(昭和十四)年四月『改造』の応募小説
に「魑魅跳梁」が佳作となった。劉はこの作品を「人
間競争」と改作し、『九州文学』九月号に発表、芥川
賞候補となった。一九四二(昭和十六)年、「九州文
学賞」選考委員となった。同年五月十三日から百四回
にわたって『福岡日々新聞』北九州版に「山河の賦」
という歴史小説を星野順一の挿画で書いた。一九四二
(昭和十七)年劉は『九州文学』一月号に「神と人の
記録」を、同年四月十日、新聞連載に若干手を加えて、
歴史小説『山河の賦』を火野葦平の序「山河の賦」
の賦をつけて東京の六芸社から処女出版した。一九
四三(昭和十八)年六月、第三回九州文学賞は劉寒吉
の『山河の賦』が授賞した。同年『九州文学』五月号
に「翁」を発表、昭和十八年度の芥川賞候補になった。
同年七月には劉は『敵国降伏』(四海書房)を出した。
同年十月『文芸読物』に「十時大尉」を発表、第十八

回直木賞候補となる。戦時下、劉たちは久留米師団演
習報道員、九州文学報国隊員、筑豊炭坑記録、相浦海
兵団入団、朝鮮半島視察というように、戦争協力の筆
を執った。一九四五(昭和二十)年七月、火野葦平、
岩下俊作、東潤らと西部軍報道部に召集され、国民精
神の振興と宣揚に協力させられた。戦争も末期症状を
呈し、文学は完全に凋落の極を示し、やがて敗戦で終つ
た。

一九四七年一月二十日、春陽堂文芸叢書の一冊とし
て『世間ばなし』(春陽堂)を上梓した。劉寒吉の戦
後は、火野葦平の盟友として『九州文学』の支柱となつ
たが、一九五五(昭和三十)年第五期『九州文学』三
月号に「風雪」を発表、昭和二十九年度後半期直木賞
候補にのぼった。一九六〇(昭和三十五)年一月、火
野葦平歿後は『九州文学』編集責任者として九州各地
の後進の指導にあたりながら、作家活動を続けた。晩
年は歴史に材をとったものが多く、『天草四郎』(一九
五八年三月二十五日、宝文館)、『黒田騒動』(一九七
〇年五月二十五日、新人物往来社)、『龍造寺党戦記』
(一九七二年十二月一日、新人物往来社)、『長崎歴史
散歩』(一九七二年一月、創元社)、『随筆集 片すみ
の椅子』(一九七七年十二月、九州文学社)、『九州芸
術風土記』(一九八三年三月、国書刊行会)、『わが一
期一会』(上)(下)二冊(一九八五年五月一日、創思
社出版)、『劉寒吉自選作品集』(一九八五年十二月二
十日、創元社)の著書を残して、一九八六(昭和六十
一)年四月二十日、七十九歳で死去した。

生前所蔵していた約一万冊の図書は、遺族から北九
州市に寄贈され、北九州市立中央図書館の『劉寒吉文
庫』とし、その他の資料は歴史博物館に収蔵された。
歿後、『劉寒吉詩集』(一九八八年四月二十日、私家版)

劉寒吉宛火野葦平書簡の紹介

——野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻(7)——

原武哲

一

筑後松崎(現・福岡県小郡市)出身の野田宇太郎(一九〇九—一九八四)は「文学散歩」の創始者であり、抒情詩人・文芸評論家であったが、雑誌『新風土』(小山書店)、『新文化』(第一書房)、『文藝』(河出書房)、『藝林間歩』(東京出版)、『文学散歩』(文学散歩の会)などの優れた編集者でもあった。これらの雑誌の寄稿者——小説家・詩人・歌人・俳人・戯曲家・評論家・翻訳家など文学関係者——からおびただしい数の書簡が野田宇太郎に寄せられた。多くは雑誌掲載の連絡のための書簡交換であるが、そこにはおのずから文学者同志の私的な心情交流が見られ、文学史的にも価値あるものと思われる。一九八四(昭和五十九)年七月二十日、野田は心筋梗塞のため、東京都東村山市の国立療養所村山病院にて死去した。生前の意志により膨大な蔵書・文献資料は、こよなく愛した故郷小郡市に寄贈され、「野田宇太郎文学資料館」(小郡市民ふれあい広場内、小郡市立図書館併設)に永久保存されることになった。

私は一九七九(昭和五四)年三月、文芸評論家荒正人氏の紹介で東京都町田市図師町の野田宇太郎宅を訪問、爾来五年間、上京の度に訪ね、親しく警咳に接し

て、文学研究の根本と資料の情報について教示を晩年に至るまで受けた。御蔭で野田宇太郎の教示、情報によって夏目漱石の未公開書簡を発見することもできた。野田歿後、所蔵の書簡の中から野田宛吉井勇書簡を野田トシ夫人(現在は故人)の御好意により借用、複写・写真撮影を許可され、既に発表したところである(福岡女学院短期大学紀要』第二十四号へ一九八八年二月、第二十五号へ一九八九年二月、第二十七号へ一九九一年二月)。

野田宇太郎について、私は既に『福岡女学院短期大学紀要』第二十四号(一九八八年二月)の「吉井勇と野田宇太郎(上)」——昭和二十年代の吉井書簡を中心に——において概略紹介したので、改めて詳述しない。この他、野田について執筆した拙稿には次のようなものがある。

- (1)「吉井勇と野田宇太郎」『毎日新聞』夕刊西部版「文化」一九八七年十一月五日付
- (2)「すみれうたを紡ぐ詩人——野田宇太郎」『西日本新聞』夕刊「文化」一九八九年十月二十六日付
- (3)「五足の靴」『野田宇太郎・丸山豊』野田宇太郎文学資料館ブックレット1、一九九一年三月三十一日、小郡市立図書館

一九八七年三月、『野田宇太郎蔵書目録』(小郡市役所)が発行され、同年十一月、遺言によって寄贈された蔵書、文献資料約3万点を収めた野田宇太郎文学資料館は故郷小郡市民ふれあい広場の中に文化会館、小郡市立図書館と共に開館した。目下、中村良之小郡市立図書館専門員(霊鷲寺住職)を中心とした方々によって整理されつつあるが、私も野田宛書簡の複写・写真撮影、解説・翻刻・注解など協力しているとある。幸い一九九一年度から九三年度までの三年間、文部省科学研究費補助金(一般研究(C))を交付されたので、その成果を報告してきた。次に列挙する。

- (1)「河井醉茗・蒲原有明書簡の紹介——野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻(1)——」『福岡女学院短期大学紀要』第二十九号(一九九三年二月)
- (2)「森茉莉書簡の紹介——野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻(2)——」『福岡女学院短期大学紀要』第三十号(一九九四年二月)
- (3)「幸田文書簡の紹介——野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻(3)——」『福岡女学院短期大学紀要』第三十二号(一九九六年二月)
- (4)「火野葦平の書簡(1)——野田宇太郎宛葦平書簡の紹介——」『文学批評 叙説』第十三号(一九九六年八月)